

保育現場における創造性を育む音楽表現に関する一考察

—中野区私立幼稚園連合教育研究会の活動を通して—

A Study on the Music Expression with Creativity in a Nursery School

伊藤 仁美
ITO, Satomi

キーワード：音楽表現、リトミック、保育者に求められる音楽能力、創造性、音楽遊び

1. はじめに

本稿は、2015年度（平成27年度）に年間通して実施された、中野区私立幼稚園教育研究会での研究活動についての報告をまとめたものである。

2. 中野区私立幼稚園研究会連合教育研究会について

東京都中野区私立幼稚園連合会は、昭和21年に結成以来、組織の中に研究部を設置して活動し、中野区の幼児教育の充実と向上を目指してきた。昭和45年に中野区立幼稚園が設置されてからは、公立、私立合同の中野区幼稚園教育研究会が発足し共に研究活動を続けている。このように、公立、私立の幼稚園が合同で研究発表会を開催することは全国的にみても、他に類を見ない試みである。筆者が携わった中野区私立幼稚園教育研究会の主な活動内容を以下に記す¹⁾。

- ① 各園における自主的な研究
- ② 共同研究の成果を、中野区幼稚園教育研究会で発表
- ③ 中野区幼稚園教育研究会の実技研修会、講演会への参加
- ④ 中野区私立幼稚園連合会主催の教職員研修会への参加

本稿は、②にあげた共同研究の部分について取り上げることとする。共同研究では、毎年公立幼稚園、私立幼稚園が各々研究テーマを設定し、それぞれ年間通して各自研究を行い、その成果を中野区幼稚園教育研究会において合同発表するものである。私立幼稚園教育研究会では、連合会に加盟している21園の幼稚園からそれぞれ1～2名程度の代表の教諭が選出され、共に研究会を重

ね、その成果を研究発表会において発表している。今年度は「創造性を育む音楽あそび」を研究テーマとし、研究発表の取りまとめ役をナザレン幼稚園が担当し、筆者は研修講師と、研究活動への助言をつとめた。

3. 研究テーマの設定背景

研究発表担当のナザレン幼稚園と協議して、研究テーマを「創造性を育む音楽あそび—子どもたちの“わくわく”を豊かに養うために—」と定めた。幼児は日々の生活の中で、遊びを通じて多くのことを経験している。思わず心が躍る、いうなれば“わくわく”する出来事に出会うと、「なぜだろう」、「おもしろい」、と興味、関心が湧き、「やってみたい」、「表してみたい」といった表出、表現意欲へと繋がっていき、さらには様々な表現方法で“遊び”へと発展させていくのである。一方で、発想が単調になり、活動を発展させていくことに苦手意識を感じている幼児の姿があることも見受けられ、このような場面で、保育者はどのような援助をしていったらよいか、考えさせられることがある。これらの理由から、今回、研究テーマとして音楽遊びに着目し、幼児が“わくわく”する心情を味わい、豊かな感性と創造性を育む音楽表現について考えることとした。

4. 研究方法

(1) 研究過程

研究会は以下の要領で行われた。

回	日程	テーマ
1	2015/5/28	「音あそび、音楽あそびとは何か」
2	2015/6/25	「言葉と音」
3	2015/9/10	「リズムの魅力—幼児の楽しいリトミック—」

4	2015/10/8	「子どもの歌の世界」
5	2015/11/12	「楽器を使った音楽活動」
6	2015/12/10	「絵本を用いた創作オペレッタ」
7	2016/2/17	中野区幼稚園教育研究発表会

(2) 事前調査

本研究を進めるにあたり、各幼稚園で行われている音楽活動の実際の様子について把握するために、第1回目の研究会の際、2つの質問項目を設けた自由記述によるアンケートを21園、計46名の幼稚園教諭に配布、全て回収した。以下にその結果の主たるものを示したい。

(3) 研究会の内容

各回の活動内容の詳細については以下の通りである。

① 第1回「音あそび、音楽あそびとは何か」

i 演習

- ・リズムの基本である「拍」(ビート)を1拍ずつ叩いて全員で拍まわしをしていく。
- ・4人グループを作り、同様に拍まわしをする。
- ・「世界中の子どもたちが」の曲に合わせて、4・4・2・2・1・1・1・1拍ずつ手拍子をしてまわしていく。
- ・絵本『はらぺこあおむし』²⁾をモチーフにした音楽あそびの紹介。絵本『はらぺこあおむし』を読み、物語に出てきた食べ物(チョコレート、サラミ、チーズ等)で様々なリズムパターンを作り、そのリズムパターンに合わせて手を叩く。その後、スカーフをちょうちょに見立て、ちょうちょが自由に飛ぶ表現へと展開して

いく。

ii 講義

- ・音楽の3大要素、「リズム」、「メロディー」、「ハーモニー」について
- ・乳幼児の音楽発達について。発達に伴い、乳幼児は「リズム」、「メロディー」、「ハーモニー」の順に音楽的な理解を示していく。

② 第2回「言葉と音」³⁾

i 演習

- ・絵本『もこもこもこ』⁴⁾、『だるまさんが』⁵⁾を読み、オノマトペの魅力、面白さを感じる。
- ・絵本『もこもこもこ』、『だるまさんが』の文字を付箋で隠し、画のみを鑑賞する。
- ・付箋を外し、音読する。
- ・オノマトペのある「大きなトンネルちいさなトンネル」、「いもむしごろごろ」、「うみ」、「あまだれぼたん」を全員で歌った後、グループに分かれて、1曲選び振り付けを考える。その後グループごとに発表する。

ii 講義

- ・オノマトペとは古代ギリシャ語に起源をもつ言葉で、ももとは「造語すること」、「名前を造ること」の意である。
- ・昨今日本では、大まかに擬音語と擬態語の総称として用いられている。
- ・子どもの歌の中にあるオノマトペを探す。「おおきなたいこ」、「とけいのうた」、「さっちゃん」

表1 質問:「幼稚園で音楽活動を行う際工夫をしている点」、「指導する上で難しいと感じる点」について記述してください。(21園、46名の幼稚園教諭が回答)

工夫している点	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめにピアノは弾かずに、保育者と子どもが向き合って、表情を見ながら歌うことを導入している。(3名) ・身振り等をつけて歌を覚える。(10名) ・絵本等を用いてイメージを持たせてから歌に入ると、歌詞を覚えやすく、理解することが早い。(3名) ・ペープサート、絵、エプロンシアターなどを使って歌の世界を表しながら伝えている。(4名) ・リズム遊びでは、ボールを使ったり動物模倣を取り入れたり、音楽と動きを関連づけながら指導している。(3名) ・カスタネットなどの楽器を用いてリズムに親しんでいる。(4名) ・踊ったり歌ったり、自由に表現を楽しめるようにしている。(5名)
難しいと感じる点	<ul style="list-style-type: none"> ・怒鳴り口調で歌ってしまうことがあるので、優しく歌うことを伝えている。(10名) ・音程が曖昧で不安定なことがある。(4名) ・座って歌うことから立って歌うことへの繋がりが難しい。(3名) ・楽器を用いた活動の際、どうやって発展的に展開したらよいか、悩むことがある。子どもが楽しんで行うことのできる活動の指導方法について考えている。(6名)

③ 第3回「リズムの魅力—幼児の楽しいリトミック—」

i 演習

- ・2人組で向き合って座り、4分音符でひざを叩く。
- ・「hip」の掛け声で4分音符を2分割（8分音符）にし、手を叩く。「hop」の掛け声で4分音符を倍の長さ（2分音符）にし、相手と手合わせをする。
- ・様々なリズムパターンを聞き分け、叩く。
- ・絵本『びたっ！』⁶⁾を読む。
- ・2人組になり、音に合わせて手拍子をし、「○○とびたっ！」の掛け声で指示された部位を相手と「びたっ」と合わせる。（例：「肩と肩をびたっ！」と言われたら、自分の肩と相手の肩をびたっと合わせる）
- ・床を基音のドの位置とし、両手を置く。ドレミファソラシドの音階を歌いながら両手を上げていき、手の位置で音階を表す。
- ・2人組になり、1人が保育者役、もう1人が子ども役となる。保育者役が歌った音程を子ども役が模倣する。
- ・「アルプス一万尺」、「はたけのポルカ」の曲に合わせて歩行、ギャロップ、スキップ、手拍子等の基礎的な動きを組み合わせたダンスを踊る。

ii 講義

- ・エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865～1950）が創案したりトミックとはどのような音楽教育方法か、なぜ幼児教育に広く取り入れられているのか。
- ・リトミック教育で育まれる様々な感覚について。

④ 第4回「子どもの歌の世界」

i 演習

- ・「ふしぎなポケット」を歌った後、歌詞からイメージされる素話を創作しグループごとに発表する。
- ・絵本『うたがみえる、きこえるよ』⁷⁾を披露する。この絵本には文章はなく、挿絵のみで構成されている。作中の絵からイメージされる歌詞をグループごとにつくり、発表する。なお、メロディは筆者が作曲した新曲を用いることとする。

⑤ 第5回「楽器を使った音楽活動」

i 演習

- ・カスタネットの奏法に触れた後、「おもちゃのチャチャチャ」を歌いながら「チャチャチャ」の歌詞のところでカスタネットを叩く。
- ・2人組になり「おもちゃ」のところで足ぶみ（ストンプ）をする。
- ・「大きな古時計」の曲を歌いながら、好きなところを、好きなリズムでカスタネットを叩く。
- ・歌の前半部は歌うことに集中し、後半部に出てくる「チクタク」の部分で、カスタネットを叩く。

- ・タンバリンの奏法に触れてから、「大きなたいこ」を歌う。2人組になり、1人がタンバリン、もう1人がカスタネットを持つ。歌詞の「ドン」の部分はタンバリン役が楽器を鳴らし、「トン」の部分はカスタネット役が楽器を叩く。
- ・2人組になり、保育者役、子ども役に分かれる。保育者役が即興で考えたリズムパターンに抑揚をつけて表し、そのリズムパターンを子ども役がタンバリンやカスタネットで模倣する。（例：保育者役「ドーン、ドーン、トトントン」と口で唱えたのち、子ども役が聞いたリズムパターンを楽器で模倣）
- ・すずの奏法に触れてから、カスタネット、タンバリン、すずを使って「山の音楽家」、「あわてんぼうのサンタクロース」を歌いながら合奏する。
- ・トライアングルの奏法に触れてから、「たなばたさま」を歌いながら、フレーズの終わりの部分でトライアングルを鳴らす。
- ・ミュージックベルの奏法に触れてから、「ドレミのうた」を歌いながら歌詞に合わせた箇所でもベルを鳴らす。（例：「ドはドーナツのド」、のフレーズではドのベルを鳴らす）

ii 講義

- ・幼児教育に簡易楽器が導入されるようになった歴史的経緯について。

⑥ 第6回「絵本をモチーフにした創作オペレッタ」

i 演習

- ・絵本『にじいろのさかな』⁸⁾を読む。
- ・登場人物のキャラクター分析をした後、スカーフを用いて海の中の世界を表現する。
- ・筆者の作曲した「プロローグ」、「きらきらうろこ」、「エピローグ」の歌を歌う。
- ・グループに分かれ、絵本の1ページずつを分担し、年長児が演じる設定で配役、セリフ、動作を考える。
- ・絵本の始めから終わりまでを通して全体発表をする。

5. 考察

(1) 4-(2)に関する考察

本研究会に参加した受講者は保育現場の中で、どのような工夫をして音楽活動を行っているか、またどのような点を難しいと感じているのか。これらについての事前調査を通して明らかになったことを述べたい。

はじめに「工夫をしている点」については、身振り（動き）、ペープサート、絵本、楽器等を用いて、視覚的や身体感覚を伴うことで、音楽のイメージを持たせている事例が複数見られた。また、リズム遊びを展開する際も、音楽と動きの関連性を重要視している事例も見受けられ

た。これらは、動きが音楽を誘発するという、さらに身体表現をともなった音楽経験は幼児の音楽表現に有効である、というリトミック・アプローチの基本概念と符合した意識をもって、音楽活動を展開していることといえよう。単一の音楽行動に絞るのではなく、身振りをつけながら歌ったり、楽器でリズムを刻みながら歌ったりする、といった複合的な音楽活動は、幼児に対して、より効果的に音楽表現の喜びや楽しみをもたらすことが期待されるのである。

「難しいと感じる点」については、歌う際、がなり声で歌ってしまうことがあることを悩んでいる事例が複数見受けられた。また、音程がうまく取れないときがあることや、音楽活動の展開方法について困難を感じていることもわかった。保育の中で幼児が一生懸命、歌っている場面において、時としてその歌唱方法が、「歌う」という範疇を逸脱して、大声で叫んでいる行為に近いことがある。音の3大要素は、音の高低、音の強弱、音の長短であるが、この3つの要素の中で幼児は音の強弱を最初に理解するといわれている。このため、歌唱表現活動の際、

「大きな声で歌いましょう」、「元気に歌いましょう」といった保育者の言葉がけによって活動が展開されていた場合、幼児が声を最大限に張り上げて、歌ってしまうことは大いに予測される姿である。一方で、音楽的な細やかなニュアンスを、幼児の理解できる語彙を使って伝え、実際の歌唱表現活動につなげていくことは、時として難しい場合もあるであろう。しかしながら、曲想標語が「語りかけるように」、「優しく柔らかかに」と明記された曲を、必要以上に大きな声を張り上げて元気に歌うことは、本来その曲の持つ魅力を、幼児が存分に味わったり感じ取っているとは言い難い。この場合、保育者自らが曲のイメージに寄り添った歌い方、声で歌って聞かせること、「工夫している点」で記述されたように、音楽の世界を多角的、複合的にイメージできるような保育者自身の指導の創意工夫が肝要といえよう。

(2) 研究会に参加した受講者の声

研究会を経て受講者がどのようなことを感じて考えたか、今後の保育における音楽表現活動に反映していこう

表2 「研究会を通して考えたことを書いてください」

1. 音あそび、音楽あそびとは何か	・音楽の3大要素、リズム、メロディー、ハーモニーのうち、幼児が最初に理解を示すのはリズムである。このことから今回は特にリズムに着目し音楽あそびを展開したが、リズムに合わせて身体全体で音楽を表現することの心地よさを感じることができた。このことを保育者自身が経験し感じ取ってはじめて、子どもにとって魅力的な音楽活動を展開できると思った。
2. 言葉と音	・子どもの歌にはオノマトペがふんだんに含まれていことがわかった。 ・オノマトペとメロディーによって表現される歌の世界には、想像を広げて感じ取る楽しさがあった。 ・まだ言葉の理解が未分化である幼児にとって、オノマトペのある歌との出会いは子どもの歌の世界観をより広げていく力があることがわかった。
3. リズムの魅力 (リトミック)	・ダルクローズが創案した音楽教育方法、リトミックには、リズムに合わせて動く心地よさや他者と触れ合いながら音楽との一体感を得る楽しさがあることを学んだ。 ・おもわず身体が動きだしたくなるリトミックを展開していくには、保育者の豊かな発想や柔軟な心が求められるのではないだろうか。
4. 子どもの歌の世界	・提示されたメロディーにオリジナルの作詞をする音楽づくり(創作活動)を試みた。浮かんでくる言葉はたくさんあったが、イメージが伝わるように、またメロディーのドラマ性と合致した言葉を選ぶことはとても難しかった。 ・創作活動を通して、普段歌っている子どもの歌が、いかに優れているのかを、改めて感じた。
5. 楽器を使った音楽活動	・楽器を使った音楽活動は保育現場の中でよく扱われるが、今回研究会に参加し、歌いながら楽器を演奏することの難しさが理解できた。 ・保育者は楽器の正しい奏法を知っておく必要性を感じた。 ・保育者の豊かな歌やピアノは子どもたちに合奏の魅力を伝えていく力があると感じた。
6. 創作オペレッタ	・絵本を題材とした、オペレッタの創作をしたが、子どもに指導する際に、保育者が物語をどのようにとらえ、展開するかを考えていく手がかりを得た。 ・音楽と動作が連動する心地よさを感じた。音楽を劇に取り入れることはより物語のメッセージ性を強めていくことがわかった。

と思っているのか、について各研究会後に実施したアンケート結果を以下に示したい。

(3) 4-(3)に関する考察

はじめに、「1. 音あそび、音楽あそび」の回では、研究会初回ということもあり、保育者自身が音楽表現の楽しさ、心地よさを経験していないことには、子どもにその魅力を伝えることはできない、という意見がみられた。保育現場に役立つ実践内容を習得し、指導法へと繋いでいきたい、という積極的な姿勢がある一方で、指導方法のノウハウのコツを掴むことだけに終始してしまうと、本研究テーマの副題に掲げた、音楽表現に対して子どもたちが“わくわく”する心情を養うことは難しい、と捉えたのであろう。「2. 言葉と音」の回では、子どもの歌には豊富にオノマトベが取り入れられている、という子どもの歌の特徴に対しての気づきを持った、といえよう。言葉での表しがまだ未分化である子どもにとって、言葉に代わるもの、思いを表してくれるものがオノマトベの世界であり、そのことを保育者自身が十分に理解して歌の魅力伝えていくことが大切なのである。「3. リズムの魅力—リトミック—」の回では、幼児期における音楽と動きの融合性による音楽表現の重要性について、考える機会となったようである。「4. 子どもの歌の世界」の回では、受講者にとってあまり馴染みのない課題に取り組んだ。課題内容は、言葉がなく、画のみで構成される絵本の画からイメージされる世界を、筆者が作曲した新曲のメロディーに合うような作詞を試みる、というものであった。毎回の研究会では受講者自らが意欲的に音楽に親しみ、楽しみながら活動に参加していたのだが、この回は、どのグループも苦勞しながら参加していた。「歌う」、「楽器を演奏する」等の音楽活動と比較すると、音楽を「つくる」、といった創作活動の経験が保育者にとって十分でないことが浮き彫りになった。保育者の音楽性をより高めるために、今後も音楽づくりの経験を増やしていくことの必要性を感じた。「5. 楽器を使った音楽活動」の回では、楽器の奏法や指導方法について、受講者からの関心が多く寄せられた。年長児ともなると、合奏の機会も増えてくると思われるが、活動の過程の中で幼児の心に芽生えてくる、自由に楽器を鳴らして音楽に親しみ、表現しようとする思いを認めつつ、保育者自身が楽器の正しい奏法、そして楽器の魅力について熟知しておくことの重要性への気づきが述べられていた。「6. 創作オペレッタ」の回では、歌う、奏でる、動きで表す、演じる等を通して総合的に音楽表現するアプローチを試みたが、これは第1回目からの研究会を経て、第6回目が最終回としての研究活動の総括の場であったためである。複合的に音楽活動を展開することは、活動のねらいをより明確

にし、手順や伝え方についても綿密な工夫が必要とされるが、その分、音楽的な感動、達成感により豊かになっていくものであろう。保育現場での発表会等を意識した研究内容であったが、発表の場において演奏が成功することだけに焦点を当てるのではなく、どのような過程を経て、幼児にとり感動的な音楽経験に繋げていくのか、そのことの意味についても問う回となった。

本研究では、全6回を通して様々な音楽表現方法に触れてきた。筆者が研究会で取り上げた活動内容は、受講者が日々の保育で行っている内容のものも多く含まれていたと思われる。今回の研究テーマを、子どもたちが“わくわく”する心情を豊かに養うことのできる創造的な音楽あそびについて考えることと設定した背景には、その音楽表現活動が本当に幼児にとって魅力的なものであるのか、ルーティンをこなす単調な活動になってしまっていないか、あるいは発表会のための練習としての活動に終始してはいなかったか、そして何よりも、保育者自身がその音楽活動を楽しみ、“わくわく”した心情をもって取り組んでいたか等、これまでの自らの保育を振り返る機会の必要性からくるものであったと考えられるのである。

6. おわりに

本研究は、幼児が楽しみながら音楽に親しみ、表現する喜びを味わうことができるようにするには、保育者はどのような関わりを持ち、援助をしていったらよいのか、という現場の保育者からの問題提起により、進められていった。このことをふまえて、各回の研究会では、多種多様なアプローチによる音楽表現に取り組んだ。扱った内容は、受講者にとって日々の保育の中で取り扱っている慣れしんだ題材、教材であったとしても、着目する観点を改めたり、展開方法を工夫することによって音楽活動がより深化されることを再確認した。当研究会は昭和45年に設立されてから46年もの間、毎年研究テーマが設定され年間を通しての研究と発表がなされているわけだが、今後も保育者は益々、保育の質的能力の向上を目指して、現場に出てからも学び続けることが必要とされていくと思われる。そのためにはより一層、保育現場と養成校との連携を強化し、保育現場の音楽表現における様々な課題を共有し、協働できる両者間の機会づくり、体制づくりの充実をはかることが重要である。

注釈

- 1) 中野区幼稚園教育研究会 (2015)、『平成27年度研究集録』、2。
- 2) エリック・カール (1976)、『はらぺこあおむし』偕成社

- 3) 第3回「言葉と音」は葛西健治氏(こども教育宝仙大学専任講師)が担当した。
- 4) 谷川俊太郎・文/元永定正・絵(1977)、『もこもこもこ』(文研出版)
- 5) かがくいひろし(2008)、『だるまさんが』(プロンズ新社)
- 6) あずみ虫(2013)、『びたっ!』(福音館)
- 7) エリック・カール(1981)、『うたがみえる、きこえるよ』(偕成社)
- 8) マーカス・フィスター(1995)、『にじいろのさかな』(講談社)